R7 楡木小学校　学校通信
No.３２
なりたい自分になる！
In 楡木サラダボウル
令和７年１２月１２日
文責　余宮

インフルエンザの大波も少しずつ沈静化しているようです。保護者の方々のご配慮の賜と、心より感謝申し上げます

予定していないことが起きた時にイノベーションが始まる

３年生の教室では、「わたしらしさ」をテーマに、道徳の授業が行われているようです。ちょっと、聞き耳を立ててみましょう。

グループでは、互いの「らしさ」を伝え合っています。「優しい」とか「〇〇が上手だよね」などなど。友達から褒めてもらう活動に、多くの子どもたちはちょっとこそばゆいような表情ですが、大変うれしそうです。暖かな空気に包まれた教室。素敵な時間です。

その後、自分の「らしさ」を友達から伝えてもらった感想を交流している時、けんとさん（仮名）が次のように述べました。

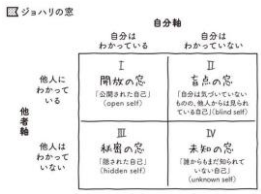
「友達からぼくのよさを教えてもらったんだけど・・・へ～、そんなこと・・・なんか、ぼくが知らなかったな、っていうことを教えてもらって‥すごく、びっくりしました」

とても素敵な言葉です。

生後１０年ほどが経ち、たくさんの経験を重ねてきた３年生の子どもたち。たくさんの疑問を解決するために、たくさんの人・モノ・ことと出会(合)い、実際に見たり触れたり話したりしてきたことでしょう。その中で、唯一自分(の顔)だけは実際に見たことがない。どうしても鏡などの他者を通じてしか自分自身を見ることができなかった。

だから、びっくりしたのでしょう。

予定されているものが予想通り起きた場合、人は驚きません。もちろん。しかし、けんとさんにとって、今日の友達からの言葉は予想外だった。自分すらも知らない自分の姿に、ほんわかと温かい戸惑いを覚えたのでしょう。へ～、ぼくってそんな人だったの？



以前、ジョハリの窓という自己理解を深めるツールを紹介しました（令和５年通信 30 号を参照。再度左にも図を示しました）けんとさんは、まさに「Ⅱ盲点の窓」を開けられたのでしょうね。だから、驚いた。

ここが終わりじゃない。

ここが、初めての「わたし」が生まれ育つターニングポイントだと、私は思うのです。

生まれて初めては、常に戸惑いが付きまといます。このことを、武芸家で思想家でもある内田樹氏は、「もどかしさ」という表現で新しい言葉が生まれる様を、次のように述べています。

> ～新しい言葉が生まれてくる前には、必ずそういう「もどかしさ」がある。でも、この沈黙は、「豊かな沈黙」なのです。それをみんなが耳を傾けて聞く。それが、その子にとってはすごく貴重な経験になる。話し始めた時には、自分がこれから何をいうつもりなのかがまだわからないのです。言葉にして初めて、自分が何を考えていたのかを知る。ですから、「大きい声ではっきり」というような発話の規律を課したら、「生まれて初めて言う言葉」は絶対に出てこない。

他者に開かれたつながりの中で、新しい自分と出会う。そこから、自分が何者かを知り、新しいつながりへと開かれる。これが、多分イノベーションというのだろうと、けんとさんの学びに、ほとほと胸を打たれた一日でした。